



獨立心と世界心の教育

——講和を機として——

倉 橋 惣 三

一

獨立心と世界心の教育の重要なことは、被占領期間においても、重んじられなければならない教育目的であつた。しかし、国として自主性をもち得ず、対等の国際關係ができなかつたきうまでには、思想として重んじられなければならぬというに止まつて、現実には真に体験せられ得ないことであつた。従つて、具現の教育目的として、生活の實際に即し難いことを免れ得なかつた。われらは決して依頼心を教えようとはしなかつた。しかし、絶対自立の心を満喫せしめることはできなかつた。世界心についても、その心得と心がけとの多くを学んだ。しかし、それは必ずしも自覚の世界心ではなかつたかもしれない。教育がこうした已み難き限界におかれた

ことは、きのうまでの国情の、どうすることもできない悲嘆であつた。而して此の悲嘆は、青年教育においても、少年教育においても、幼年教育においても、同じであつた。われら自らが、この現実の限界をわきまえて、適應するところあつたのは、理解と得心と希望との下に耐えつゞけたとして、若きもの小さきものに、これを課することは、目前常につらいことであつた。更に将来のために深く憂慮を禁じ得ないところでもあつた。

爾來六年。これからは、獨立國家としての獨立心の教育が、世界國家としての世界心の教育が、国民生活そのものの獨立的世界的現実に即して實現せられ得るのである。講和は蘇りであるが、この蘇りは、単に外的關係の蘇りであるだけでなく、新生する内質の蘇りでなければならぬ。われら幼児

教育者も、その教育目的に、眞の独立心の教育と世界心の教育とを正しく強く蘇らせなくてはならない。

二

もうこれからは、被^レ占領下の日本製品 (Made in occupied Japan) と特記してある玩具を、子供の前に持ち出さなくともいゝ。聯合軍の命により、(By the command of allied forces) という揭示を子供の目の前に押しつけなくてもいゝ。そういうものに見なれさせることが、子供の独立心に及ぼす影響について、われらの胸は如何に痛められたであつたらう。外国人に対して、親しむ心、感謝する心は偽りないことであつたが、そのなかには、与ゆることなく、たゞ受ける非対等關係の心が混ざることがないとは言えなかつたりした。世界心の健全を曇らせるものがないとも言えなかつたりした。若しこれらの状態が、これ以上長くつゞいたら、われらの子供の臨時的(?) 国民感情が、更に怖るべき漫性的なものにならなかつたとも言えないのである。講和条約調印の日、日本人は、いろ／＼の意味でホツとした感じをもつたと言つてゐるが、教育としては、これからこそ、眞の独立心と世界心の教育ができる喜びである。但し、それは決して安易に行われ得ることではない。苦惱と憂慮(講和全権の言葉)なしにはあり得ないことであるのは明かである。しかも、そうしてこそ、眞に眞なる独立心も世界心も教育されるであらう。

うし、それをしつかりしないと、六年間の悲しい癖が、後に残つたりしては困る。——独立心のないところに眞の世界心はないし、世界心のない独立心は正しい独立心であり得ない。

三

独立心にいろ／＼の面があるが、こゝで重要に思うのは、第一に自主的精神のことである。第二に自力行動のことである。幼児の場合、自力行動は自分の力を用いないで人にたよることである。自主的精神とは、幼いなりに自分の考え方と判断の決定力をもつことである。いずれも、日常生活の間において指導されてゆくし、強められてゆく。但し頑固は似而非自立心である。

世界心は思想として觀念としては、幼児には充実し難いが、世界心を妨げ、世界心に反する心の動きを防ぎとめることは、幼児生活の指導の間において充分意を用い得るし、徹底させることもできる。殊に独立心を失わない世界心を心掛けることによつて、似而非世界心を斥けることができる。

思えば、太平洋戦争以來、独立心と世界心との正しさを失うこと久しかつた。この間、諸文化の空白を慚くことは多いが、国民精神として最も遺憾であつたのは、この点である。その恢復のために、全面的努力、細心の注意を払わなければならぬ。このことを講和直後の本誌本号の巻頭に語るのは、幼児教育の当面の重要問題としてとあることは(三〇頁へ)

其頃フレールベル会々員は何人位あつたかは記憶しませんが、全国幼稚園の数は明治四十年の統計年鑑に依ると、二百九十五で、保母の数は七百八十三人でありましたが、勿論会員はこの中の何分の一かであつたでしょう。

夫から二三年経つてから私は附属小学校の批評係を兼任することになつて、其方に多く時間を取られるようになったので、幼稚園へは和田実君という神奈川県師範学校の卒業生で、以前中村さんが其学校の校長時代の教え子であつた人が這入つて来ましたので、「婦人と子ども」の編集なり事務なりは一切和田氏にやつて貰うことにして、私は雑誌から手を引いて仕舞つたように記憶して居ます。

「婦人と子ども」を育てゝ行く上に付いては、黒田恩師を始め、本校職員の一三の方から深い同情と激励とを受けましたが、別して東京盲啞学校の小西信八先生から何かと御親切な忠言を戴きました。こゝに附記して今は亡き先生方の靈に對して深く感謝の意を表する次第であります。

さて明治四十一年に私は地方の師範学校長に転じ、中村さんも其後奈良県師範学校長に転任され、安井てつさんが幼稚園の主事をやつて居られたようでしたが、倉橋さんのお見えになつたのは、安井さんの後かと存じますが、其倉橋さんの手で「婦人と子ども」も「幼児の教育」という名実共に立派な機関雑誌となり、こゝに「婦人と子ども」發刊以来五十卷を重ねるに至つたことは誠に喜に堪えぬ所であります。こゝに五十年前の思い出を記しましたが当時幼稚園に在園した男

女の幼児達で、今生存されて居られる方々は、何れも六十近いよいお年になつて居られる訳です。実に五十年一夢の如し、この稿を草するに當つて、アルバムをくり広げて、其当時の先生や保母さん達の写真を眺めながら、暫らくは懐旧の念に打たれるのであります。

(了)

(三頁から)素よりであるが、幼児教育のためのも素よりである。幼児教育のためとしても、おとなの正しい独立心と世界心との確立を第一とする。われら自らに確立しない心で、幼児の心を教育することは決して希い得ないからである。

本稿において、敢て愛国心といわず独立心というのは、決して愛国心を斥けるのではないが、愛国心という語の、屢々誤用されたことのあるを思つてである。愛国心による独立心よりも、独立心による愛国心でこそあるのではあるまいか。又、敢て平和といわず世界心というのは、素より平和を思むのではないが、平和という語の往々曲用せられたことのあるを思つてである。平和は好ましい理想である。世界心はそれを実現しようとする現実である。

幼児教育を浅細、小局のことのみ思うものは、われらの間にない筈である。しかも、われらの担当する幼児の教育が、如何に深く広き、人類生活の大局を基礎づけてゆくものであるかを、今日更めて、深思せずにはいられないのである。

(一九五一、九、一〇)